

才八回大会の印象

一九六〇年度の大会は、愛知地元会員のご努力によつて蒲郡での宿泊大会が実現した。一昨年の鳴子大会におけるような充実した成果が期待され、テーマも激動する現今の社会体制下にあつて、「政治と農民」という問題が掲げられた。これらの期待にこたえて開かれた「蒲郡荘」における二日間の大会は、地元会員の心暖るご準備によるせいか、時間的にも気分的にもかなり充実した宿泊大会となつた。発表、討議の内容もさることながら、ドテラ姿の懇親会などで得た会員相互の親睦は、決して他の会ではえられぬ貴重なものであつた。

今年の大会の共同課題は昨年に引続いて「政治体制と村落」ということであつたが、とくに福武会員の提案（六月、研究通信三五号）

などもあつて、「政治と農民」の問題を中心におこうということになつた。ただこれを直接問題にした研究発表は、園田、山本、松原の各氏による「政治動向と農民意識」の一つだけであつたが、共同討議はかなり熱心につゝこんだ討論であり、それだけにいくつかの共通点も見出しえたようにおもえた。それについてはテープを再録したとき、あらためて検討していただくことにする。

今年の大会に際して課題にたいする会員の賛同は非常に多かつた（アンケートによる）にも拘らず、研究発表の申込みが非常に少なかつたことが事務局を少々あわてさせた。もう少し課題にたいする研究発表があつてもよかつたのではないかと思われる。しかし、個々の研究発表については、持時間も比較的多かつたから、相当に力のはいつたものであつた。

第一日目の田原会員の「東北村落における地主制と政治体制」は山形県朝日町の調査報告を通じて、東北村落における地主制の規定の問題へのアプローチを試みられたようである。田原会員自身が指摘されたように地主制と政治体制との結合をどのように把握し、それを東北村落のなかでどのように位置づけるかの問題は、東北村落研究にとつて農地改革以後の村落の政治支配ということを追求するうえからも、非常に重要なことでもあり、今回の発表に引続いて研究を要する点ではなからうかと考えられる。

安原、島崎会員による「農民層の分解と農村支配の構造」は、かなり理論的にも検討が加えられ、調査資料も十分に整備された発表であつた。農業経済学と農村社会学とが階層構造の分析について、方法論的にもまた実際のにもどこで結びつきうるかを念頭において新潟県下の実態調査の結果を引用しながら、階層構造と独占資本との関連、共同体との関連について指摘された。園田、山本、松原会員による「最近における政治動向と農民意識」は今次大会の共同課

題に真向から取り組んだ研究報告であろうと期待された。報告の内容は、(1)調査地(山形県庄内地方〇町)における安保斗争の概要、(2)安保問題をめぐる農民の態度―調査結果のデーターを中心に―、(3)民主主義、議会政治にたいする農民の意識、(4)農民(農村)の政治態度の今後の問題点。このような形で、安保の問題と農民意識の問題を分析、発表された。発表者もいふように問題が非常に新しい事態を取扱つただけに、「この発表では内容的にも調査の中間報告的な域を出なかつた」ようで、今後多くの問題が残されているように思えた。質問において、安保および安保の進め方それ自体に対しての研究者側の評価の点などが問題にされた。第二日目の中島会員の「村落における政治的適応の諸形態」は村における政治的合意の正当性が、相互的適応のかたちで保障されていることを、村落構造とのつながりからのべられたのであるが、かなりはつきりした理

論的な枠づけでもつて、歯切れのよい線を打出された。内容については、ここで述べる紙面をもたないが、後日、研究通信か何かの形で会員諸氏に発表していただけるものと期待している。原会員の発表は対馬住吉神社の祭祀行事を政治体制と村落生活との側面から観察されたのであつたが、細かな分析資料のわりには政治体制との関連の主張が稀薄だつたように思われた。最後に愛知大学の玉城繁氏の漁村の共同組織と「家」の問題　とくに愛子および分家の慣行―について、三重県下の漁村の調査をもとに興味深い発表をいただいた。

このようにして蒲郡庄における二日間の合宿大会も、充実した内容と落着いた気分のうち、所期の目的を達して、全日程を終つた。この間、非力な事務局に代つて手際の良いご援助と準備をして下さつた愛知地元会員の方々に心からの感謝の意を表したいと思う。

(前事務局 米村富男)